

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 4 月 30 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23510317

研究課題名(和文) 中国北方少数民族の生活変容の記憶と現在にかんする社会学的研究

研究課題名(英文) Sociological study about memories of changing lives of ethnic minorities in North China

研究代表者

坂部 晶子 (SAKABE, Shoko)

名古屋大学・国際開発研究科・准教授

研究者番号：60433372

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円、(間接経費) 1,050,000円

研究成果の概要(和文)：社会主義国家の特異な民族政策下において、中国の北方少数民族の人びとが経験してきた生活変容のプロセスを明らかにすることによって、生活領域や生活様式の近代化のなかで獲得されてきたもの、喪失しつつあるものについて、彼ら自身の生活世界の視点から示した。とくに近年復興しつつある民族イベントは、当該民族の人びとにとって「創られた伝統」であることは看取されつつも、彼らの一定のアイデンティティの源泉ともなっている。こうした関与のプロセスを、政府の民族政策批判でもなく、単なる一民族の承認運動でもない、当事者自身に生かされた社会史の一端として描きだした。

研究成果の概要(英文)：This research project traced the process of changing lives that the ethnic minorities in North China experienced under the particular ethnic policy of the socialist state. It showed what is acquired and what is losing under modernization of their life fields and life styles from the position of their own life-world. The ethnic events that are reviving during recent years are recognized as the invented traditions by the ethnic minorities themselves, and are a certain amount of the source of their identities. This research project describes these involvement processes as piece of the social histories lived by themselves, that is neither denial toward the ethnic policy of the state nor the movement asking for identity approval of one ethnic group.

研究分野：地域研究

科研費の分科・細目：アジア

キーワード：北方少数民族 オロチョン エヴェンキ 民族イベント 生活変容

1. 研究開始当初の背景

中国北方少数民族の生活領域である東北地域にかんする歴史学的研究では、従来の帝国主義研究にとどまらない新たな近代史も見られるようになってきているが、少数民族にたいする視点は希薄である。また中国とロシアにまたがって生活してきた民族を、一国研究の枠組みでとらえることは困難であった。オロチョンやエヴェンキなどの中国北方少数民族は、自己の文字もなく数も少ないままマクロな社会変容のプロセスのなかに埋没し、直接的な研究対象となることは少なかった。この一世紀のあいだに狩猟採集社会からグローバル化社会へと極端な社会変容を経験し、長期にわたって相互接触を行い中国東北地域の歴史を形成してきたこれらの少数民族の多元的な社会史は、これからの研究が期待される領域である。

中国の少数民族にたいして個別の研究を積み重ねてきたのは、中国独自の民族学・人類学である。中国の民族学・人類学は社会主義圏人類学の一つとして西洋人類学の発展とは独立した独特の資料集積を行ってきた。しかしこうした研究で分析される社会変容は、当該民族の言語や伝統文化の消失という局面に限定されることが多い。本研究は、狩猟採集社会にいた人びとが植民地侵略や近代国民国家形成というマクロな近代化のプロセスのなかで、自らの生活変容をどのようにとらえてきたのかという社会学的な主題を直接分析の俎上にのせるために企図されたものである。

2. 研究の目的

本研究は、中国北方少数民族の生活世界の変容を、彼ら自身の集合的・個人的記憶の語りをとおして再構成し、中国東北社会の歴史を多元的現実として描きだすことを目的としている。この地域の歴史は、マクロな国家間関係や植民地侵略、国民国家形成史の一部として包括されてきた。一方で、現在中国各地で民族運動が高まりを見せるなか、中国社会の多元的民族的統合そのものが揺らいでいるとも考えられる。本研究のねらいは、たんなる中国国家の民族政策批判ではなく、たんなる一つの少数民族の承認運動でもない、少数民族の複合的な生活世界の視点からの歴史解釈の次元を中国東北近現代史、北東アジア地域研究にたいしてつけ加えることにある。従来、個別の伝統や生活様式の伝承者として対象化されるだけであった少数民族自身からみた東北地域の社会生活の変容プロセスを描き出し記述していくことは、中国東北社会の主流の歴史記述にたいして、少数民族の複合的な生活世界の視点を架橋していくための前提作業となる。

3. 研究の方法

中国北方少数民族の生活世界の変容を、彼ら自身の集合的・個人的記憶の語りをとおし

て再構成し、中国東北社会の歴史を多元的現実として描きだすことを目的とした本研究の目的にてらし、具体的な調査および研究方法として、以下の三点を実施した。

(1) 中国北方諸民族にかんする通時的歴史資料・民族資料の収集分析。

とくに以下の三種類の資料を、オロチョン、エヴェンキを中心に可能な限り収集し、検討を加えた。19世紀末以降「満洲国」期までに主として日口の軍人・行政・研究者によって行われた民族調査の資料、新中国建国直後に政府主導で行われた民族認定のための調査資料、民族自治旗を中心に編纂されている地方誌や『文史資料』。

(2) 民族自治旗における民族的イベントについてのフィールド調査と分析。

90年代以降、復活している民族的イベントにおける舞踊や歌唱等の伝統芸能の維持・更新プロセス、あるいは特徴的な歴史事象の表象プロセスにかんする参与観察を行った。これらのイベントは、現在の国家や地方政府の方針のもとで開催される形態のものでありその点での留意は必要だが、当該民族の現時点での代表的な民族文化への関与のかたちを知ることができる。

(3) 少数民族集団における古老を中心としたライフヒストリーの収集と分析。

オロチョン、エヴェンキなどの60歳代以上の人々は、建国以前に山野で生活した経験をもち、各民族の言語・文化・習俗・歴史にかんして直接的な経験と知識を維持している。彼ら個々にライフヒストリーと現在までの生活変容の記憶について個別のインタビュー調査を行った。

上述の課題を総合するかたちで、北方少数民族の生活変容の記憶について、当事者の視点の抽出と分析を試みた。

4. 研究成果

本研究では、少数民族集団自身の生活変容のプロセスについて、当事者自身の語りをとおして再構成し、そこから経験の意味や解釈をとらえかえす社会的アプローチによって、以下のような論点について明らかにした。

(1) 社会主義国家の民族政策の特異性と現状についての分析

中国共産党による新中国成立以降の民族政策は、いっぽうでは、国民党時代の極端な同化主義政策にたいする批判にもとづいており、先行する社会主義政権であったソ連の民族理論に影響されつつ成立してきた。それゆえ当初より多民族国家が標榜され、諸民族の基本的状況や人数を把握するために、1950年代初めより、各地に中央からの訪問団が送られ、民族の名称や言語、歴史、人数などを調査する「民族識別工作」が行われた。この民族識別によって、「制度的に保障された民族」が確定することになる。

現在の中国社会において、数億人もの人口

を擁するマジョリティとしての漢民族はあくとしても、それ以外の民族については、人口という指標だけに限ってみても、数千人規模のものから千数百万人規模のものまでさまざまな民族があるにもかかわらず、外面的には「少数民族」として一律に確定され、アイデンティファイされている。

ただし「認定された民族」の制度的な構築性やその基準の恣意性を指摘するだけなら、これまでも言及されているものである。本研究では、とくにオロチョン自治旗の民族イベント分析をとおして、民族識別による諸「民族」の枠組みは、新中国成立以降の60年間のなかで、あるいは民族認定以降の歳月において、当該のそれぞれの民族の生活を規定している、中国の少数民族の生活世界は、民族認定を前提として生きられてきている点について明らかにした。

(2) 隣接民族との共通性、民族集団内部の多様性・異質性についての分析

現在内モンゴル自治区および黒龍江省などに分散して居住しているオロチョン族とエヴェンキ族は、日本による植民統治時代には、一括して「オロチョン」民族と呼ばれていた。その下位区分として、主要な飼育動物の違いから「馬オロチョン」と「トナカイ・オロチョン」に区分されていた。現在の中国の民族制度のもとでは、「馬オロチョン」が「オロチョン族」にあたり、「トナカイ・オロチョン」が「エヴェンキ族」にあたる。当時の両者の生活形態は、山野での狩猟採集を主としており共通する部分が多いが、トナカイ・オロチョンのほうがロシアの影響を受けている比重が高かったと報告されている。

現在の民族制度のもとでの「エヴェンキ族」には、この「トナカイ・オロチョン」だけでなく、草原地帯で羊などの遊牧を行うグループと、かなり初期から農業に転換しているグループも含まれており、同一民族内部での生業や生活形態についても差異が大きいという現状が明らかになった。

民族自治地域とそれ以外に居住する少数民族では、民族支援の体制が異なり、生活条件についても差異が感じられる。一概に自治地域のほうが生活レベルが高いというわけではないが、一定の政策的支援が得られることが多い。たとえば、エヴェンキ族自治旗内部のエヴェンキ族牧民と、根河市域に居住する獺民との違いや、オロチョン自治旗内のかつての獺民（現在は農業へ転換）と、黒龍江省に居住するオロチョンの集落などには、一定の相違がみられる。ただし、民族地域ではないことから、集落ごとの農業生産に新たな試みを取り入れたり（黒龍江省塔河县十八站におけるキノコ生産など）や、民族文化の観光化への取り組み（黒龍江省黒河市新生郷など）を行ったりするなど、民族自治地域以外

のほうが生活状況が多様化している傾向にあることがわかる。

(3) 地方政府による民族イベント・商業化されていくイベント、伝統の形成

1980年代以降の中国では、改革開放政策のもと市場経済化と対外開放が進められるが、少数民族地域においては、それぞれの「民族性」や固有の文化の意識化が進行している。またそれにとともに、文革中は抑え込まれていた各民族の伝統行事や祭典が、新しいかたちでの民族イベントとして復活し活性化してきている。そこでは、当事者自身の解釈による民族の伝統や文化の継承が進行していると考えられる。

本研究では、オロチョン自治旗建旗60周年記念大会を事例として取り上げ分析した。オロチョン自治旗建旗60周年記念大会は、オロチョンたち自身の地方政府として中国全体で最初にできた人民政府成立60周年を記念して、2011年9月に開催された。10年前にも建旗50周年の大会が開かれており、地方政府としては10年に一度の大規模な記念イベントの開催となる。政府主催のイベントではあるものの、この企画には彼ら自身の民族の祭典という位置づけもある。このとき行われた主要な行事の一つである「かがり火祭（篝火節）」は、オロチョンの「伝統的」祭とされているもので、1990年代に復活して毎年続けられている。祭の形式は、現代的、また中国社会のイベントごとに共通するかたちにまとめられているが、当事者たちにとっては、「民族の式典」として意識されていることが明らかになった。

またオロチョン自治旗自体は、交通の便が悪く、これらの「民族の式典」はほとんど商業化されていないが、同じフルンポイル市でも、中心地に近いエヴェンキ族自治旗では、いくつかの民族的な活動が活発となり、ごく一部では商業化もめざされていることが確認できた。

(4) 研究成果を踏まえた今後の展望

これまでの研究成果を踏まえて、今後も中国北方民族の生活領域において、インテンシブなフィールドワークを実施するとともに、中国社会における「社会主義的近代」の経験を、周縁部に生きる人びとの視点から描き出すための方法論を精緻化していきたい。

本研究では、北方民族の生活世界の変容を複数の民族集団へのフィールド調査、分析をとおして明らかにしてきた。しかし、これまでの研究のなかでは、隣接して居住する複数の民族のあいだの相互の関係や、歴史的に形成されてきた民族間関係などについては、いまだ調査の途上の段階にある。さらに、隣接の規模や影響力の大きい民族集団と小民族との関係、さらには中国社会で認定されていない民族集団（たとえばプリヤート人など）の歴史についても、今後の研究のなかに取り

入れていきたい。

なお、下表は本研究課題において調査を行った地域とその調査内容について、まとめたものである。

調査地	対象・場所	調査内容		
内モンゴル自治区フルンポイル市	鄂倫春自治旗阿旗	鄂倫春民族研究会	民族資料収集、当事者へのインタビュー	
		少年宮・劇場	ウランムチの劇団のリハーサルの参与観察、劇団員へのインタビュー	
		スタジアム	オロチョン民族村からの参加者リハーサルの参与観察、当事者へのインタビュー	
		庫図爾其広場	篝火祭への参与観察、当事者へのインタビュー	
		敖魯古郷獵民新居	当事者へのインタビュー	
	根河市	市内	トナカイ・エヴェンキ幹部へのインタビュー	
		エヴェンキ族獵民点	トナカイ遊牧の生活の参与観察とインタビュー	
		鄂温克(自治区級)民族研究会	民族資料収集	
	鄂温克族自治旗	南屯	鄂温克(旗級)民族研究会	民族資料収集、イベント開催状況調査
			伊蘭工作室	民族服の作成にかんするインタビュー(ダウール族)
エヴェンキ族の若者、モンゴル族の若者		若者の生活状況および伝統芸術への関与についての聞きとり		
鄂温克族自治旗政府		民族幹部へのインタビュー		

輝蘇木	劇場	民族イベントのリハーサルの参与観察
	市内	民間の民族楽団への聞きとり調査
	牧民自宅	当事者インタビュー
	牧民自宅	当事者インタビュー
木伊敏蘇	牧民自宅	当事者インタビュー
蘇錫尼河	牧民自宅	当事者インタビュー
陳バルク旗鄂温克族蘇木	牧民自宅	当事者インタビュー
海拉爾	侵華日軍海拉爾要塞遺址群	展示内容調査
	劇場	ウランムチによる公演の調査
	ライブハウス	モンゴル・バンドの公演調査とインタビュー
	民族史研究者、民族芸術研究者、女性幹部経験者、民族芸術監督(以上エヴェンキ族)	エヴェンキ族の民族的伝統や歴史の研究の現状について聞きとり

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

坂部晶子「中国北方少数民族鄂倫春社会中的殖民地秩序的崩潰与社会秩序的重組」、『鄂倫春研究』第 34 号、2012 年第 1 期、査読無、29 - 34 頁。

坂部晶子「北方民族オロチョン社会における植民地秩序の崩壊と再編』『アジア遊学』145 号(『帝国崩壊とひとの再移動 引揚げ、送還、そして残留』) 査読有、2011 年 9 月、104 - 112 頁。

[学会発表](計 3 件)

坂部晶子「民族イベントにみられるオロチョン族の『伝統』意識」、中日韓朝言語文

化比較研究国際シンポジウム（於延辺大学）2013年8月20日。

坂部晶子「帝国と国家の周縁部から見た北東アジア 大興安嶺山中のオロチョン自治旗を事例として」、日中韓三カ国学術シンポジウム「ポスト金融危機における北東アジア地域の発展と協力」（於山東省済南市、山東省社会科学院主催）2012年9月25日。

坂部晶子「中国東北地域における植民地経験のフィールドワーク」、日本社会学会第84回大会・若手企画部会「社会学的想像力と方法の現在 『東アジア』を調査する」（於関西大学）2011年9月。

〔図書〕（計 5 件）

蘭信三編（著者は編者および坂部晶子他 33名）『帝国以後の人の移動 ポストコロニアリズムとグローバリズムの交錯点』、勉誠出版、2013年11月、全 981 頁中 527 - 539 頁。

吉原和男・蘭信三・伊豫谷登志翁・関根政美・山下晋司・吉原直樹編（著者は編者および坂部晶子他 171名）『人の移動事典 日本からアジアへ・アジアから日本へ』、丸善出版、2013年11月、全 528 頁中 48-49 頁。

中筋直哉・五十嵐泰正編（著者は編者および坂部晶子他 37名）『よくわかる都市社会学』、ミネルヴァ書房、2013年4月、全 216 頁中 18-19 頁および 136 - 137 頁。

貴志俊彦・松重充浩・松村史紀編（著者は編者および坂部晶子他 101名）『二〇世紀満洲歴史事典』、吉川弘文堂、2012年12月、全 840 頁中 198 - 200、365 - 366、384、422、493、515 - 516、543 - 544、656 - 657、697 - 698 頁。

野上元・福間良明編（著者は編者および坂部晶子他 41名）『戦争社会学ブックガイド 現代社会を読み解く 132 冊』、創元社、2012年3月、全 309 頁中 210 - 212 頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂部 晶子 (SAKABE Shoko)

名古屋大学・大学院国際開発研究科・准教授

研究者番号：60433372